

キンメダイ 天皇海山海域

(Splendid alfonso Beryx splendens)



キンメダイ (左：成魚、右：“イトヒキンメ”と呼ばれる当歳魚)

管理・関係機関

北太平洋漁業委員会

(North Pacific Fisheries Commission : NPFC)

最近の動き

天皇海山海域におけるキンメダイは、クサカリツボダイ不漁時の代替漁業資源として 1970 年代後半から漁獲され始め、1980 年代前半の漁獲量は年間 1 万トンに達した。それ以降はおよそ 700 トンから 5,700 トンの間で推移している。大きな卓越加入によりクサカリツボダイの漁獲量が 2 万トンを超えた 2012 年には、キンメダイは約 791 トンしか漁獲されなかったが、2013 年以降はクサカリツボダイの不漁が続いていることからキンメダイの漁獲量が増大すると同時に、底びき網の漁獲物では小型魚の割合が増加した。2016 年には漁獲量が 5,000 トン近くに達したものの、2017 年以降は漁獲量が減少している。2019 年には NPFC の保存管理措置として小型魚の漁獲を

防ぐための網目規制が導入され、今後はその有効性のモニタリングが求められる。2021 年以降は NPFC 底魚類・海洋生態系小科学委員会のもと、本種とクサカリツボダイを扱うクサカリツボダイ・キンメダイ小作業部会において議論が進められている。

利用・用途

冷凍ラウンドの形状で主に加工材料として水揚げされ、青森県産、ミッドウェー海域産の原産地表示のもと、干物、煮付け等として販売されている。丸魚のまま、もしくは切り身の解凍鮮魚が販売されることもある。小型魚の干物（開き）は比較的廉価で販売されており、高級生鮮魚としての流通を主体とする日本近海産キンメダイとは異なる販売戦略がとられている。

漁業の概要

天皇海山はハワイ諸島北西からアリューシャン列島まで約 3,000 km にわたり連なる海山列である（図 1）。北緯 45 度以

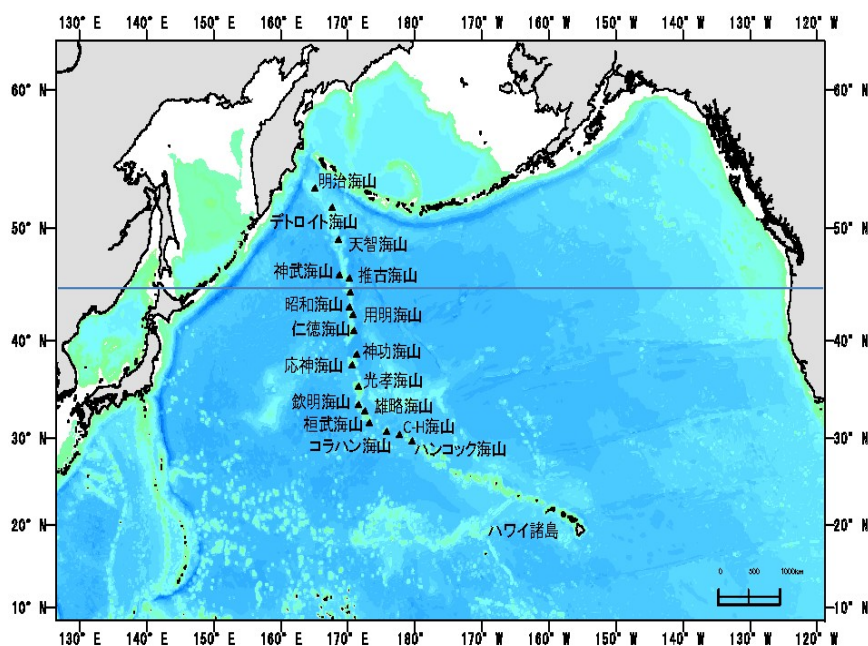


図 1. 天皇海山列の地図

コラハン海山から推古海山南バンクまでが底魚漁場として利用されているが、キンメダイが漁獲されるのは仁徳海山以南である。

南の公海上にあり、頂上水深が 300～500 m の平坦な海山が底びき網漁場として (Sasaki 1986、水産庁 2008a)、海山斜面や水深が比較的大きい海山が底刺網漁場として利用されている (水産庁 2008b)。主な漁獲対象種はクサカリツボダイであるが、同種は卓越加入の有無により漁獲量の年変動が極端に大きい。キンメダイ、オオメマトウダイ、ハゲヤセムツ、カガミダイ、メダイ、オキカサゴ等が代替魚種として利用されている (澤田ほか 2017)。キンメダイはこれら代替魚種の中で最も漁獲量が多く、水揚げ単価も高いことから、クサカリツボダイ漁獲量の低迷に伴い総漁獲量の大部分を占める重要魚種となっている。

キンメダイを狙った操業は、1967 年の旧ソ連による天皇海山漁場の開発から 10 年を経てクサカリツボダイの漁獲量が激減した 1970 年代後半から始まった。1975 年以前には最大でも 600 トンであった日本の年間漁獲量は徐々に増加し、1980～1982 年には年間 8,585～11,831 トンに達した (図 2)。一方、1985 年以降の漁獲量は、1991 年を除けば年間 5,000 トン

を下回っている。最近ではクサカリツボダイの卓越加入年であった 2010 年、2012 年の漁獲量がそれぞれ約 970 トン、約 752 トンと少なかったのに対し、クサカリツボダイの加入量が極めて少なく漁獲量が低迷している 2013 年以降は年間漁獲量が増加し、2016 年には約 4,851 トンに達した。しかし、それ以降は減少傾向にあり、2019 年から 2023 年は年間約 713～1,701 トンであった (表 1)。

クサカリツボダイの漁獲低迷に伴い天皇海山海域での操業隻数は 2013 年の底びき網船 6 隻、底刺網船 1 隻から近年減少し、2020 年以降、同海域で操業している日本の漁船は底びき網船 1 隻、底刺網船 1 隻である。近年、天皇海山海域において我が国以外にキンメダイの漁獲実績があるのは、韓国の底びき網漁業 (2004 年のみ、底はえ縄も) であるが、2004 年～2019 年の漁獲量は年間およそ 13～513 トンに留まり、2020 年以降は操業がない。また、旧ソ連及びロシアは 1982～2009 年の間、底びき網及び底はえ縄によって年間およそ 6～926 トン漁獲していたが、2014 年から 2018 年及び 2021 年にはアブラボウズ

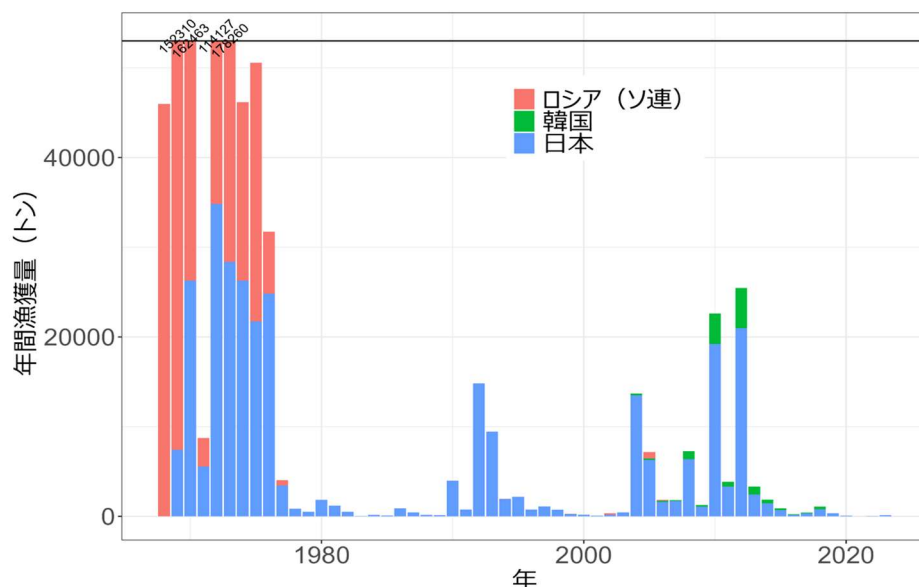


図 2. 天皇海山海域におけるキンメダイの国別漁獲量及びクサカリツボダイの総漁獲量の推移 (1969～2023 年)

表 1. 日本、韓国、ロシアによる漁業種類別キンメダイ漁獲量 (トン、2010～2023 年)

漁業国	日本			韓国			ロシア			計
	底びき網	底刺網	計	底びき網	底はえ縄	計	底びき網	底はえ縄	計	
2010年	18,215	1,006	19,221	3,401	0	3,401	0	0	0	22,622
2011年	3,175	145	3,320	532	0	532	0	0	0	3,852
2012年	19,623	1,350	20,973	4,487	0	4,487	0	0	0	25,460
2013年	2,350	87	2,437	880	0	880	0	0	0	3,316
2014年	1,441	32	1,472	404	0	404	0	0	0	1,876
2015年	714	2	717	172	0	172	0	0	0	889
2016年	176	8	184	50	0	50	0	0	0	234
2017年	261	53	314	100	0	100	0	0	0	414
2018年	674	119	793	298	0	298	0	0	0	1,092
2019年	327.6	23.5	351.1	20.1	0.0	20.1	0.0	0.0	0.0	371.2
2020年	26.4	54.2	80.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	80.6
2021年	16.0	8.9	24.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	24.9
2022年	6.8	27.3	34.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	34.1
2023年	14.9	133.3	148.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	148.2

を主対象とした底はえ縄操業、2022 年にはかにかご操業のみを行いキンメダイの漁獲はなかった（表 1、図 2）。

生物学的特性

【分類】

キンメダイ *Beryx splendens* は、キンメダイ目キンメダイ科キンメダイ属の一種である。キンメダイ属には本種の他にナンヨウキンメ *B. decadactylus* とフウセンキンメ *B. mollis* が含まれ、ナンヨウキンメは天皇海山海域においてキンメダイと同所的に生息するが（Mundy 2005）、キンメダイと比べ漁獲量は少なく、フウセンキンメについては記録がない。フウセンキンメはかつて、キンメダイと同一種として扱われることもあったが、形態的（Yoshino *et al.* 1999、Yoshino and Kotlyar 2001）、遺伝的（Akimoto *et al.* 2006）な相違が明らかになり、現在では別種とされている。

ナンヨウキンメは体高や背鰭軟条数により他 2 種と容易に区別できる。フウセンキンメは後鼻孔と鱗の形状、幽門垂や鰭条の計数形質によりキンメダイと識別可能とされているが（Yoshino *et al.* 1999、Yoshino and Kotlyar 2001、林 2013、池田・中坊 2015）、この近縁 2 種を外見から区別することは難しく、分子的な判別手法が開発されている（Nishida *et al.* 2022）。

【分布と回遊】

キンメダイは大西洋、インド洋、太平洋の温帯から熱帯域に分布し、大陸棚外縁、陸棚斜面や海山に生息する（水産庁 2008c、Shotton 2016）。また地中海西部においても安定した個体群の存在が示唆されている（Di Blasi *et al.* 2018）。本種の分布域はナンヨウキンメとほぼ重なり（Shotton 2016）、フウセンキンメの分布域よりも高緯度まで広がる（Yoshino and Kotlyar 2001）。

本種は卵～幼魚期に表中層で浮遊生活を送る。秋元（2007a）はいくつかの海域で漁獲された個体の最小尾叉長を元に、本種が尾叉長 12～18 cm の間に着底すると推察した。さらに耳石の微細輪紋が日輪であると仮定して、前述の尾叉長と微細輪紋数の関係から浮遊期の長さは 150～300 日間と推定した（秋元 2007a）。着底後は水深 200～800 m に多く生息し（Busakhin 1982）、日没から日出の間に中層に鉛直移動して採餌すると考えられている（増沢ほか 1975、Galaktionov 1984）。同様の日周鉛直移動の可能性は、天皇海山海域でも指摘されている（柳本 2004）。日本近海では着底後に大規模な移動はしないと考えられていたが、一部個体が成長・成熟に伴い関東沿岸から伊豆諸島や南西諸島へ移動する例が報告されている（池上 2004、武内 2014、亘ほか 2017）。ニューカレドニア海域では成長に伴い、浅い海山から深い海山へ移動する可能性がある（Lehodey *et al.* 1994、1997）。海山周辺では、餌生物の出現量と関連して湧昇・下降流が強いほど、形成される魚群も大きくなる傾向がある（Vinnichenko 1997、秋元・高橋 2008）。

1970 年代の漁場開発調査（井口 1973、黒岩 1973）及び近年の科学オブザーバー報告によると、天皇海山海域では北緯 41 度付近の仁徳海山から北緯 30 度のハンコック海山の範囲で漁獲報告がある。本種を狙った操業は、底びき網で水深 300

～500 m、底刺網で水深 300～1,000 m で行われており（柳本 2004）、着底後はこの範囲に主に分布すると考えられるが、天皇海山海域におけるキンメダイの浮遊期間やその間の分布域、海山への着底時期、着底後の移動については十分な情報が得られていない。

【繁殖】

卵巣内に完熟卵が出現する尾叉長は 28～35 cm（大西 1985、芝田 1985、Lehodey *et al.* 1997、秋元ほか 2005）、50%の個体が成熟する尾叉長（ FL_{50} ）は概ね 31～35 cm であり（Lehodey *et al.* 1997、González *et al.* 2003、秋元ほか 2005、Shotton 2016）、我が国沿岸における性成熟年齢（繁殖開始年齢）は 4～5 歳と推定される（秋元ほか 2005）。ただし FL_{50} は海域・研究ごとの違いも大きく、例えば南インド洋では約 38 cm（Brouwer *et al.* 2021）、チリの個体群では 40～44 cm（Flores *et al.* 2012）、シエラレオネ海嶺では約 27 cm（Salmerón *et al.* 2021）と見積もられている。卵母細胞の発達様式は非同期発達型であることから、一産卵期に複数回の産卵を行うと考えられている（増沢ほか 1975、Alekseev *et al.* 1986）。卵巣内卵数は日本近海の体長 40 cm 前後の個体で 30～50 万粒（増沢ほか 1975）、ニューカレドニア海域の尾叉長 34～40 cm の個体で 27 万～38 万粒（Lehodey *et al.* 1997）と推定されている。産卵期は海域によって異なるが（Flores *et al.* 2012）、日本近海では夏に産卵すると考えられている（増沢ほか 1975、芝田 1985）。

これまで天皇海山海域において本種の卵は採集されていないが（柳本 2004）、1984 年 7 月にハンコック海山南東部において標準体長 6.0～27.5 mm の稚魚が採集されていることから（Mundy 1990）、天皇海山では夏に繁殖している可能性が考えられる。高橋（2018）による耳石日輪数と生殖腺重量指数の解析からも同じく、夏が産卵期であると推定されている。NPFC 各加盟国・地域が収集したデータの分析によれば、産卵期は春から秋にかけて長く続き、少数ながら冬にも成熟個体がみられている（Hasegawa and Sawada 2021、Nishizawa and Sawada 2022）。 FL_{50} の推定値には成熟の判別手法や漁具選択性の影響が大きい（Nishizawa and Sawada 2022、Ayer *et al.* 2023）、後述する NPFC 小作業部会では約 303 mm という推定値がベースケースとして採用された（Amoroso *et al.* 2024、Pons *et al.* 2024）。

人工孵化実験の結果によると、本種の受精卵は水温 23℃でおよそ 48 時間後に孵化し、孵化時間は 21.5～25℃の範囲では高いほど早い（大西 1966、1968）。孵化後の卵黄吸収までには水温 23℃でおよそ 4 日を要し、卵黄吸収後の仔魚は、水面付近で各鰭を細かく振動させつつ遊泳し、索餌行動も認められるようになる（大西 1966、1968）。日本沿岸の個体群ではしばしば卓越年級群が発生し、資源動態に大きく影響する（米沢ほか 2011、亘ほか 2017）。加入量変動の要因として、産卵期の水温が卵稚仔の生残に影響する可能性や（大西 1968、神奈川県水産試験場 1971、増沢 1972a）、黒潮流路によって漁場への卵稚仔移送量が変動する可能性等が指摘されている（増沢 1972b、神奈川県水産試験場 1975、増沢ほか 1975、山田ほか 2007、武内 2014、亘ほか 2017）。一方、天皇海山のキ

ンメダイについては、このような初期生残・加入に影響する環境要因は不明である。

【食性】

一般にキンメダイの主な餌生物は、ハダカイワシ類等の中深層性魚類、イカ類、エビ類、オキアミ類であり（増沢ほか 1975、Dürr and González 2002、堀井 2007）、成長に伴い魚食傾向が強くなることが指摘されている（Dubochkin and Kotlyar 1989、堀井 2007、Horn *et al.* 2010）。海山列では、海山毎の生物相の違いを反映して胃内容物の種組成が変化するという報告もある（Gushchin 2022）。仔稚魚の食性は不明である（亘ほか 2017）。

天皇海山海域での胃内容分析によれば、空胃率は約 1 割と低く、胃内容からはオキアミ類、アミ類、ヨコエビ類、カイアシ類、翼足類、ハダカイワシ類、小型イカ類、海藻類が検出された（井口 1973、奈須・佐々木 1973、柳本 2004）。また成長に伴い、有殻翼足類、浮遊性エビ類等のプランクトン食から魚類、頭足類等のマイクロネクトン食に移行する傾向が示されている（Nishida *et al.* 2016）。

【捕食者】

天皇海山海域における捕食者は不明である。日本近海ではサメ類やイルカ類、バラムツ等による食害が報告されており（亘ほか 2017、高木 2020）、ナメカジメの胃内容から記録されている（Taniuchi 1988）。その他の海域ではシイラ（Varghese *et al.* 2013）、メカジキ（Clarke *et al.* 1995）、タスマニアクジラ（Best *et al.* 2014）、少数だがキハダ（Laptikhovsky *et al.* 2021）等の胃内容から記録されている。

【系群】

ミトコンドリア DNA の部分塩基配列分析では、大西洋とイ

ンド洋・太平洋の間、並びに、北大西洋内の一部海域間に遺伝的分化が認められている。しかし、インド洋と太平洋間における遺伝的分化は認められず、大洋間で共通するハプロタイプが検出されている（Hoarau and Borsa 2000、柳本ほか 2015）。日本近海のキンメダイを対象としたマイクロサテライト DNA 分析では、遺伝的分化は認められなかった（大河ほか 2008）。標識放流調査では、関東沿岸で放流された個体の 8 割以上が関東沿岸から伊豆諸島北海域で再捕された一方、伊豆諸島南部海域や黒潮上流域である高知県沖、さらに 1,000 km 以上離れた南西諸島で再捕された個体も存在することから（木幡ほか 1992）、本種は黒潮流域において大規模な回遊を行っている可能性がある（亘ほか 2017）。

千国（1971）、柳本（2004）は本種が日本沿岸と天皇海山海域の間を移動回遊するという仮説を提唱している。上述のように本種は 150～300 日に亘る浮遊期間を持ち、着底後に 1,000 km 以上移動する個体もあることから、日本沿岸と天皇海山海域間を移動回遊している可能性も考えられるが、仮説を直接的に支持する研究成果は未だ得られていない。そのため、天皇海山海域におけるキンメダイは独立した系群として取り扱われている（亘ほか 2017）。

【年齢と成長】

本種の年齢は、耳石（扁平石）の輪紋（透明帯・不透明帯）の年周性に基づいて推定されてきた（Massey and Horn 1990、Lehodey and Grandperrin 1996、Adachi *et al.* 2000、Rico *et al.* 2001、明神・浦 2003、Taniuchi *et al.* 2004、Santamaría *et al.* 2006、秋元 2007b）。海域により若干の違いはあるものの、成長式より算出された年齢一尾叉長関係から（表 2）、本種は一般に 1 歳で約 16～22 cm、3 歳で 24～28 cm、5 歳で 28～32 cm、10 歳で 37～41 cm、15 歳で 41～46 cm（全て尾叉長）に成長すると考えられる。日本周辺での耳石の年齢査定による

表 2. 天皇海山とその他海域におけるキンメダイの年齢一尾叉長関係

文献	海域	年齢	1	2	3	4	5	10	15
		性別	年齢に対する尾叉長 (mm)						
Amoroso <i>et al.</i> 2024	天皇海山	両性	211	239	264	287	309	394	451
高橋 2018	天皇海山	オス	194	223	249	272	294	376	428
		メス	195	225	252	276	298	384	438
Adachi <i>et al.</i> 2000	日本近海	オス	197	228	254	278	298	369	405
明神・浦 2003		メス	166	206	240	269	294	377	415
		オス	176	217	251	280	304	376	406
Taniuchi <i>et al.</i> 2004		メス	178	220	256	286	312	393	429
		両性	178	224	263	298	329	432	485
秋元 2007b		オス	173	206	235	262	285	371	422
Lehodey and Grandperrin 1996	ニューカレドニア近海	メス	187	223	254	283	308	401	456
		オス	174	212	245	273	297	377	416
Santamaría <i>et al.</i> 2006	南西インド洋	メス	168	211	248	281	309	406	456
Brouwer <i>et al.</i> 2021	南東インド洋	両性	195	223	248	271	293	377	432
Massey and Horn 1990 ニュージーランド近海	Palliser Bank	両性	209	235	260	283	305	394	457
		オス	202	234	263	289	312	396	445
	Tuaheni High	メス	208	239	267	293	317	409	468
		オス	214	243	271	295	318	404	458
Rico <i>et al.</i> 2001 マカロネシア	Paoanui Ridge	メス	246	267	287	307	326	408	476
		オス	163	207	245	278	307	401	447
	カナリア諸島	両性	215	247	275	299	319	386	417
	マデイラ諸島	両性	195	217	239	259	278	358	418
	アソレス諸島	両性	205	240	270	295	317	382	410

最高齢は 26 歳（明神・浦 2003）であり、標識放流した個体が 18 年後に再捕された例があることから、寿命は少なくとも 20 年を超える（亘ほか 2017）。

天皇海山のキンメダイの耳石輪紋も年周性を示すと考えられ（高橋 2018）、これに基づいた年齢査定が行われている（柳本 2004、高橋 2018）。柳本（2004）の成長式では他海域に近い成長速度を示すが、この推定では若齢魚（1～4 歳）のみを用いているため、成長速度が過大推定されている可能性がある。より幅広い体長範囲（1～13 歳）を対象とした高橋（2018）は、若齢魚の成長速度が他海域と比べて小さい傾向を指摘している。

上記の年齢・尾叉長関係と乗船オブザーバーが報告している体長組成データを照合すると、天皇海山海域の底びき網漁業の漁獲開始年齢は 1 歳未満（尾叉長 10 cm 前後）、体長の最頻値は概ね 1～2 歳（尾叉長 18～24 cm）に相当し、着底直後の未成魚から漁獲対象になっていることがわかる（Sawada *et al.* 2018）。2009 年以前の経年的な漁獲物体長組成は不明だが、底びき網では 1974 年と 1993 年にも 1 歳前後（尾叉長の最頻値が 18～20 cm）を漁獲していた記録があることから（高橋・佐々木 1977、柳本 2004）、このような小型魚の漁獲は歴史的に行われてきた可能性がある。また、ここ数年で漁獲物の平均尾叉長はさらに小さくなる傾向にある（Sawada *et al.* 2018）。後述するように 2019 年には網目規制が導入されたが、2018 年と比較すると漁獲体長組成の変化は漁船や季節によって異なり、一貫した変化は見られなかった（Sawada and Ichii 2020a）。一方、底刺網の漁獲開始年齢は 1～2 歳（尾叉長 20 cm 前後）、最頻値は概ね 4～7 歳（尾叉長 28～31 cm）である（Sawada *et al.* 2018）。

高橋（2018）の推定した雌の漸近尾叉長・漸近体重はそれぞれ約 53 cm、約 2 kg であり、これは漁獲物中の最大サイズ（Sawada *et al.* 2018）と概ね一致する。一方、NPFC 小作業部会においてベースケースとして採用された漸近尾叉長（雌雄区別せず）はそれより少し大きく、約 56 cm である（Amoroso *et al.* 2024、Pons *et al.* 2024）。

資源状態

【資源の評価方法】

2008 年に天皇海山海域のキンメダイを対象とした余剰生産モデルによる資源解析が行われたが（Nishimura and Yatsu 2008、水産庁 2008c）、内的自然増加率 r の値が他海域のキンメダイ（Wiff *et al.* 2012、 $r=0.12$ ）と比べて大幅に高く推定されており（ $r=0.9\sim 1.6$ ）、本種のような長寿命・低成長の深海性魚類としては不自然な値となっている等、疑問点も多い（Sawada and Ichii 2020b）。キンメダイはクサカリツボダイ不漁時の代替魚種として狙い操業の対象となるため、補正を行わない見かけ上の単位努力量あたりの漁獲量（nominal CPUE）はクサカリツボダイの卓越加入の有無によって大きく変動し（例えば、クサカリツボダイの卓越加入があればゼロに近い値まで落ち込む）、本種の資源動向を反映しない可能性が高い。キンメダイ・クサカリツボダイの漁獲量の対数比を用いて努力量を補正した adjusted CPUE も用いられているが、この計算によって狙い努力量（クサカリツボダイ及びキンメダイをそれぞ

れ狙った操業の努力量）の変化を適切に補正できているか検証されていない。漁獲物組成から狙い操業を検出する directed CPUE 法（Biseau 1998）を近年のデータに適用した解析によれば、優先的に漁獲されるクサカリツボダイの卓越加入とその後の減少に応じて、狙い操業の比率は漁獲量の対数比よりもはるかに激しく変動しており、adjusted CPUE は狙い操業の影響を十分補正できていない可能性が高い（澤田ほか 2017）。また上述のように、近年はより小型の個体が漁獲されており、漁獲対象年齢範囲が若齢魚まで拡大することで、産卵親魚量の低下に反して nominal CPUE が高止まりや上昇傾向を示す可能性も考えられる。さらに本種のような集群性魚類は、魚群探知機で群れを探し出して操業することにより、資源量が低下しても直ちに CPUE が低下しない可能性もある。加えて、漁獲の多くを占める日本籍底びき網漁船に虚偽報告が発覚したため、詳細な漁獲データには不確実性が大きい（Sawada *et al.* 2018、澤田 2019）。

一方、成長乱獲及び加入乱獲をそれぞれ定量化する「加入量あたり漁獲量（Yield Per Recruitment：YPR）」「加入量あたり産卵資源量（Spawning Per Recruitment：SPR）」の解析は、資源量指数や詳細な漁獲データがなくても適用可能である。したがって、これら生活史ベースの管理指標に基づき、漁獲開始年齢や漁獲死亡係数を調節するアプローチが有効と考えられ（Sawada *et al.* 2018、Sawada and Yonezaki 2019、Sawada and Ichii 2020b）、後述する NPFC 小作業部会においてこのアプローチが適用された（Pons *et al.* 2024、Sawada 2024）。

【資源の水準・動向】

天皇海山漁場の開発当初は、資源の豊富なクサカリツボダイが主要な対象魚種であり、キンメダイの年間漁獲量はほとんどの年でゼロから数十トン程度であった。しかし、クサカリツボダイ資源量の減少に伴い 1976 年頃からキンメダイの漁獲量が急増し（佐々木 1985）、1980 年には 1 万トンを超えた。1980 年前後には nominal CPUE だけでなく adjusted CPUE も急増したことから、Nishimura and Yatsu（2008）はこの時期にレジームシフトが生じ、キンメダイ資源が急増したという見解を示した。しかし、これはクサカリツボダイからキンメダイに主対象魚種がシフトした時期と一致しており（佐々木 1985）、上記の通り adjusted CPUE の狙い操業補正効果には疑問があるため、レジームシフトではなくキンメダイ狙い操業の増加を反映したものである可能性が高い（澤田 2019）。佐々木（1985）は、1982 年ごろからキンメダイの CPUE が頭打ち傾向にあるとして、資源動向に警鐘を鳴らしている。1985 年以降の漁獲量はまれに 6,000 トン弱の年があるものの、1,000～4,000 トン程度の年が多い。

2008 年の余剰生産モデルを用いた資源評価では、10 年平均の漁獲圧が最大持続生産量（MSY）水準に比べて 20～28% 高いと推定され、推定資源量も B_{MSY} より小さく乱獲状態と推定された（Nishimura and Yatsu 2008、水産庁 2008c）。底びき網漁業の nominal CPUE は 2012 年から 2016 年にかけて増加傾向にあったが、これは上記のように、クサカリツボダイの資源枯渇に伴うキンメダイ狙い操業の増加、並びに小型魚の漁獲量増大等を反映している可能性があり、親魚資源量の増加と見

なすべきではない。実際に、directed CPUE では同じ期間に明瞭な増減傾向は認められなかった（澤田ほか 2017）。

本種については、小型魚の過剰漁獲が資源に悪影響を及ぼす可能性が複数の海域で指摘されており、天皇海山における資源も例外ではない。Shotton (2014) は南インド洋産キンメダイの YPR 診断により、漁獲開始年齢を 2.8 歳（標準体長 22 cm）から 8.4 歳（標準体長 35 cm）に引き上げれば、漁獲量はおよそ 10 倍に増加すると試算している。日本沿岸（千葉県・東京都・神奈川県・静岡県）では小型魚の保護策として、全長 22 ～30 cm 以下（海域により異なる）の再放流が実施されている（亘 2017、亘ほか 2017）。一方で天皇海山海域の底びき網漁業（後述する網目規制の導入前）では、前述のように尾叉長 10 cm 前後の当歳魚から漁獲を開始し、2016 年時点では漁獲物の平均尾叉長が 20～22 cm（1～2 歳に相当）となっているため、成長乱獲が懸念される。高橋（2018）は、天皇海山における YPR 曲線を作成して資源診断し、漁獲圧が低い場合を除き、漁獲開始年齢を 3 歳以上とすることで、加入あたり漁獲量を大きく減少させることはなく、自然死亡係数の不確実性も考慮すると、漁獲開始年齢を 4 歳とすることが望ましいと指摘している。また Sawada and Yonezaki (2019) も同様に YPR 診断を行い、1～2 歳に相当する小型魚を漁獲している 2018 年までの状況は望ましくないとした。本種の成熟開始年齢は 4～5 歳と考えられており、SPR の観点からも、漁獲開始年齢を引き上げることが望ましい。2024 年には NPFC 小作業部会において、YPR 及び SPR 解析を実施し、トロール漁業について成長乱獲を強く示唆すると同時に、資源全体が加入乱獲の状態にある可能性を指摘する内容の報告がなされた（Pons *et al.* 2024、Sawada 2024）。NPFC 小科学委員会ではこの報告を受けて、成長乱獲が生じている可能性が高いこと、未成魚の漁獲により産卵ポテンシャルが損なわれている可能性があること、ただし底びき網の選択率に関する仮定により悲観的な方向へのバイアスがあり得ることの 3 点を年次会合への報告事項とした（Small Scientific Committee on Bottom Fish and Marine Ecosystems 2024）。2019 年にはこれらの懸念から後述する網目規制措置が導入されたが、網目以外の要因による体長組成の年変動が大きく、現時点で明確な効果は確認されていない（Sawada and Ichii 2020a、Ayer and Sawada 2024）。

管理方策

天皇海山を含む北西太平洋公海域の底魚漁業に対して、NPFC による保存管理措置が 2016 年に採択されている。そのうち本種の漁業に直接的に影響するものとしては、漁獲努力量（漁船数等）を 2007 年レベルから増加させないこと（我が国では底びき網 7 隻、底刺網 1 隻以内）、C-H 海山と光孝海山南東部の禁漁（主目的は冷水性サンゴ類等の保全）、11～12 月（クサカリツボダイの産卵期の一部；2025 年以降 11～1 月に改訂）の禁漁、底刺網のフットロープを海底から 70 cm 以上離して敷設することがある。これらの措置は NPFC 設立準備国によって 2009 年に導入された暫定措置を引き継いだものである。さらに 2019 年から、本種の小型魚保護を目的とした底びき網の網目規制（5 kg の張力で網目を引っ張った際のコッドエンド目合い 13 cm 以上）が導入された。この規制はクサカ

リツボダイに対する推奨漁獲量の設定と合わせて順応的管理措置の一環として提案されたものではあるが、この規制を順応的管理と呼ぶことは「順応的管理 7 つの鉄則」（松田・西川 2007）に照らし適切ではないことが指摘されている（澤田 2020）ほか、NPFC の小科学委員会においても順応的管理とはみられておらず、キンメダイへの順応的管理についてはその必要性も含めて議論を継続することとされている（Small Scientific Committee on Bottom Fish and Marine Ecosystems 2021）。クサカリツボダイの強加入が検出された年には、キンメダイを狙う操業も含めて、桓武海山北部と雄略海山における底びき網操業が禁止されるが、この措置が適用されたことはない。

さらに我が国では、底びき網船の合計曳網時間を年間 5,600 時間以下に抑える自主措置も導入している。これは 2008 年の余剰生産モデル解析（【資源の水準・動向】参照）に基づき漁獲努力量を 20%削減することを目的とし、NPFC 設立準備国によって 2009 年に導入されたものを引き継いでいる。しかし、曳網時間制限の根拠とされた余剰生産モデル解析は、上に指摘した狙い操業の変化と小型魚を主体とする漁獲への移行による CPUE のバイアスを含み、資源動向と漁獲の影響を適切に反映していない恐れがある。その他に天皇海山水域における底刺網漁業の許可の条件として、底刺網の網目の結節から結節までの長さは 12 cm 以上に制限されている。我が国の漁業者団体の自主措置として 1 ケース 16 kg 120 尾入り以上となる小型魚の製品の生産を自粛していたが、この措置は NPFC による網目規制の導入に伴い 2019 年に廃止された。

NPFC では本種をクサカリツボダイと並ぶ底魚資源評価の優先対象種に掲げている。2020 年の NPFC 科学委員会においては、本種とクサカリツボダイの資源評価に関連する議論を進めるための小作業部会の設立が合意され、2021 年からはこの小作業部会内で資源解析やデータ集約等の作業が進められている。

執筆者

外洋資源ユニット

外洋底魚サブユニット

水産資源研究所 水産資源研究センター

広域性資源部 外洋資源グループ

澤田 紘太・大澤 祐美子・新井 慧・

山口 素臣・エアー クリストファー ガードナー

参考文献

- Adachi, K., Takagi, K., Tanaka, E., Yamada, S., and Kitakado, T. 2000. Age and growth of alfonso *Beryx splendens* in the waters around the Izu Islands. Fish. Sci., 66: 232-240.
- Amoroso, R., Pons, M., Arai, S., Ayer, C., Song, H., and Sawada K. 2024. Life history parameters for Splendid Alfonso (*Beryx splendens*) in the North Pacific. NPFC-2024-SSC BFME05-WP08. 21 pp.
- Ayer, C.G., Arai, S., and Sawada, K. 2023. Size at maturity of splendid alfonso (*Beryx splendens*) from the Emperor

- seamounts. NPFC-2023-BFME04-WP10. 9 pp.
- Ayer, C.G. and Sawada, K. 2024. Impact of mesh size change on catch size composition of splendid alfoncino *Beryx splendens* in the Emperor Seamounts. NPFC-2024-SSC BFME05-WP15. 10 pp.
- 秋元清治. 2007a. ミトコンドリア DNA 分析によるキンメダイの集団遺伝構造及び卵仔魚の分布様式の解析. 神奈川県水産技術センター論文集, 1: 1-64.
- 秋元清治. 2007b. 伊豆諸島周辺海域におけるキンメダイの年齢と成長. 神奈川県水産技術センター研究報告, 2: 13-19.
- 秋元清治・久保島康子・三谷 勇・斎藤真美. 2005. 伊豆諸島周辺海域におけるキンメダイ *Beryx splendens* 雌の成熟. 日本水産学会誌, 71: 335-341.
- Akimoto, S., Itoi, S., Sezaki, K., Borsa, P., and Watabe, S. 2006. Identification of alfoncino, *Beryx mollis* and *B. splendens* collected in Japan, based on the mitochondrial cytochrome b gene, and their comparison with those collected in New Caledonia. Fish. Sci., 72: 202-207.
- 秋元清治・高橋則行. 2008. キンメダイ漁場における海況と海底地形魚群形成に及ぼす影響. 神奈川県水産技術センター研究報告, 3: 25-33.
- Alekseev, F.E., Alekseev, E.I., Trunov, I.A., and Shlibanov, V.I. 1986. Macroscale water circulation, ontogenetic geographical differentiation and population structure of alfoncino, *Beryx splendens* Lowe, in the Atlantic Ocean. ICES CM 10. 16 pp.
- Best, P.B., Smale, M.J., Glass, J., Herian, K., and Heyden, S.V.D. 2014. Identification of stomach contents from a Shepherd's beaked whale *Tasmacetus shepherdi* stranded on Tristan da Cunha, South Atlantic. J. Mar. Biol. Assoc., 94: 1093-1097.
- Biseau, A. 1998. Definition of a directed fishing effort in a mixed-species trawl fishery, and its impact on stock assessments. Aquat. Living Resour., 11(3): 119-136.
- Brouwer, S., Wragg, C., Flanagan, B., and Heaphy, C. 2021. Alfonso growth, length and maturity estimates from fish sampled Cook Island trawl vessels in SIOFA. SIOFA SERAWG-03-09-rev1. 26 pp.
- Busakhin, S.V. 1982. Systematics and distribution of the family Berycidae (Osteichthyes) in the world ocean. J. Ichthyol., 22: 1-21.
- 千国史郎. 1971. 北太平洋の海山と底生魚類. 水産海洋研究会報, 19: 1-14.
- Clarke, M.R., Clarke, D.C., Martins, H.R., and Silva, H.M. 1995. The diet of swordfish (*Xiphias gladius*) in Azorean waters. Arquipélago, 13A: 53-69.
- Di Blasi, D., Carlig, E., Ferrando, S., Ghigliotti, L., Psomadakis, P., and Vacchi, M. 2018. A new record and biological evidence supporting the establishment of *Beryx splendens* (Actinopterygii: Beryciformes: Berycidae) in the western Mediterranean basin. Acta Ichthyol. Piscat., 48: 183-188.
- Dubochkin, A.S., and Kotlyar, A.N. 1989. On the feeding of alfoncino (*Beryx splendens*). J. Ichthyol., 1: 1-7.
- Dürr, J., and González, J.A. 2002. Feeding habits of *Beryx splendens* and *Beryx decadactylus* (Berycidae) off the Canary Islands. Fish. Res., 54: 363-374.
- Flores, A., Wiff, R., Gálvez, P., and Díaz, E. 2012. Reproductive biology of alfoncino *Beryx splendens*. J. Fish Biol., 81(4): 1375-1390.
- Galaktionov, G.Z. 1984. Features of the schooling behavior of the alfoncino, *Beryx splendens* (Berycidae) in the thalassobathyal depths of the Atlantic Ocean. J. Ichthyol., 24: 148-151.
- González, J.A., Rico, V., Lorenzo, J.M., Reis, S., Pajuelo, J.G., Afonso Dias, M., Mendonça, A., Krug, H.M., and Pinho, M. R. 2003. Sex and reproduction of the alfoncino *Beryx splendens* (Pisces, Berycidae) from the Macaronesian archipelagos. J. Appl. Ichthyol., 19: 104-108.
- Gushchin, A.V. 2022. Feeding of fish at the seamounts of the Whale Ridge (South-Eastern Atlantic Ocean). 2. Splendid alfoncino *Beryx splendens* (Berycidae). J. Ichthyol., 62: 641-656.
- Hasegawa, T., and Sawada, K. 2021. Preliminary report of estimating size at sexual maturity for splendid alfoncino (*Beryx splendens*) in the Emperor seamounts. NPFC-2021-SSC BF-ME02-WP08. 9 pp.
- 林 公義. 2013. キンメダイ. In 中坊徹次 (編), 日本産魚類検索第三版, 東海大学出版会, 神奈川. 577-578 pp.
- Hoarau, G., and Borsa, P. 2000. Extensive gene flow within sibling species in the deep-sea fish *Beryx splendens*. C.R. Acad. Sci. Paris, 323: 315-325.
- 堀井善弘. 2007. キンメダイの食性を明らかにして資源管理方策に役立てる. 平成 18 年度東京都島しょ農林水産総合センター主要成果集. <https://www.ifarc.metro.tokyo.lg.jp/arc/hive/26,360,52,215.html> (2024 年 11 月 28 日)
- Horn, P.L., Forman, J., and Dunn, M.R. 2010. Feeding habits of alfoncino *Beryx splendens*. J. Fish Biol., 76: 2382-2400.
- 井口健一. 1973. 北部中央太平洋における底びき網漁場企業化調査概要 II. 水産海洋研究会報, 23: 47-56.
- 池田博美・中坊徹次. 2015. キンメダイ・フウセンキンメ. In 南日本太平洋沿岸の魚類. 東海大学出版部, 神奈川. 78 pp.
- 池上直也. 2004. 標識放流結果からみたキンメダイの移動. 黒潮の資源海洋研究, 5: 65-70.
- 神奈川県水産試験場. 1971. キンメダイ資源の漁況に関する研究-II. 神奈川県水産試験場資料, 50: 1-13.
- 神奈川県水産試験場. 1975. 底魚資源調査研究報告 (昭和 42~44 年度). 神奈川県水産試験場資料, 145: 1-51.
- 木幡 孜・今井正昭・杉浦暁裕・戸井田伸一・久保島康子・田島良博. 1992. 標識放流・海域別年齢漁獲尾数・漁獲支援によるキンメダイの分布生態. 神奈川県水産試験所研究報告, 13: 41-51.
- 黒岩道德. 1973. 北部中央太平洋における底びき網漁場企業化調査概要 I. 水産海洋研究会報, 23: 42-47.
- Laptikhovskiy, V., Naulaerts, J., Clingham, E., Collins, M.A., Cranfield, M., Henry, L., Small, A., Stamford, T., Xavier, J., and

- Wright, S. 2021. Comparative feeding strategies of yellowfin tuna around St Helena and adjacent seamounts of the South Atlantic Ocean. *J. Appl. Ichthyol.*, 37(1): 38-52.
- Lehodey, P., and Grandperrin, R. 1996. Age and growth of the alfonsino *Beryx splendens* over the seamounts off New Caledonia. *Mar. Biol.*, 25: 249-258.
- Lehodey, P., Grandperrin, R., and Marchal, P. 1997. Reproductive biology and ecology of a deep-demersal fish, alfonsino *Beryx splendens* over the seamounts off New Caledonia. *Mar. Biol.*, 128: 17-27.
- Lehodey, P., Marchal, P., and Grandperrin, R. 1994. Modelling the distribution of alfonsino *Beryx splendens*, over the seamounts of New Caledonia. *Fish. Bull.*, 92: 748-759.
- Massey, B.R., and Horn, P.L. 1990. Growth and age structure of alfonsino (*Beryx splendens*) from the lower east coast, North Island, New Zealand. *N. Z. J. Mar. Freshw. Res.*, 24: 121-136.
- 増沢 寿. 1972a. キンメダイ資源の漁況に関する研究-II 産卵期の水温からみたその後の漁獲量の推定. 神奈川県水産試験場資料, 63: 1-7.
- 増沢 寿. 1972b. キンメダイ資源の漁況に関する研究-III 漁況と海況との関連について. 神奈川県水産試験場資料, 64: 1-16.
- 増沢 寿・倉田洋二・大西慶一. 1975. キンメダイその他底魚類の資源生態. 水産研究叢書, 28, 日本水産資源保護協会, 東京. 105 pp.
- 松田裕之・西川伸吾. 2007. 自然再生事業における十の助言と八つの戒め. 日本ベントス学会誌, 62: 93-97.
- Mundy, B.C. 1990. Development of larvae and juveniles of the Alfonsins, *Beryx splendens* and *B. decadactylus* (Berycidae, Beryciformes). *Bull. Mar. Sci.*, 46(2): 257-273.
- Mundy, B.C. 2005. Checklist of the fishes of the Hawaiian Archipelago. *Bishop Mus. Bull. Zool.*, 6: 1-704.
- 明神寿彦・浦 吉徳. 2003. 高知県産キンメダイの年齢と成長. 黒潮の資源海洋研究, 4: 11-17.
- 奈須敬二・佐々木 喬. 1973. 開洋丸による中部太平洋海山調査. 水産海洋研究会報, 23: 56-70.
- Nishida, K., Chiba, S.N., Sakuma, K., Higashi, R., Suzuki, N., Miyamoto, M., Yonezaki, S., Hoshino, K., and Sawada, K. 2022. Multiplex polymerase chain reaction method with species-specific primers for differentiation of two closely related fish species, *Beryx splendens* and *B. mollis* (Actinopterygii: Beryciformes). *Jpn. Agric. Res. Q.*, 56(3): 283-294.
- Nishida, K., Murakami, C., Yonezaki, S., Miyamoto, M., Okuda, T., and Kiyota, M. 2016. Prey use by three deep-sea fish in the Emperor Seamount waters, North Pacific Ocean, as revealed by stomach contents and stable isotope analyses. *Environ. Biol. Fish.*, 99(4): 335-349.
- Nishimura, A., and Yatsu, A. 2008. Appendix C: キンメダイの資源評価のためのプロダクションモデル. Application of surplus-production models to splendid alfonsino stock in the Southern Emperor and Northern Hawaiian Ridge (SE-NHR). 11 pp.
- http://www.jfa.maff.go.jp/j/study/pdf/appendix_c.pdf (2024年11月28日)
- Nishizawa, B. and Sawada, K. 2022. Sexual maturity of splendid alfonsino (*Beryx splendens*) in the Emperor seamounts. NPFC-2022-SSC BFME03-WP06. 8 pp.
- 大河俊之・秋元清治・明神寿彦. 2008. マイクロサテライトDNA分析からみた日本沿岸域におけるキンメダイ *Beryx splendens* の集団構造. 黒潮の資源海洋研究, 9: 73-78.
- 大西慶一. 1966. キンメダイ人工孵化についての試み. 魚類学雑誌, 14: 27-35.
- 大西慶一. 1968. キンメダイの初期生活史に関する研究-I 人工ふ化によって得られた卵, 仔魚の形態および特性について. 静岡県水産試験場研究報告, 1: 17-26.
- 大西慶一. 1985. キンメダイの資源補給に関する研究—(2) 産卵生態について. 伊豆分場だより, 219: 6-8.
- Pons, M., Amoroso, R., and Sawada, K. 2024. Yield per recruit and spawning biomass per recruit analyses for Splendid Alfonsino (*Beryx splendens*) in the North Pacific. NPFC-2024-SSC BFME05-WP09. 22 pp.
- Rico, V., Lorenzo, J.M., González, J.A., Krug, H.M., Mendonça, A., Gouveia, E., and Afonso Dias, M. 2001. Age and growth of the alfonsino *Beryx splendens* Lowe, 1834 from the Macaronesian archipelagos. *Fish. Res.*, 49: 233-240.
- Salmerón, F., Barcala, E., Fernandez-Peralta, L., Rey, J., and Báez, J.C. 2021. Life history baseline of unexploited populations: The case of *Beryx splendens* from the Sierra Leone Rise. *Reg. Stud. Mar. Sci.*, 47: 101942.
- Santamaría, M.T.G., Abellán, L.L., and González, J.F. 2006. Growth of alfonsino *Beryx splendens* Lowe 1834 in the South-West Indian Ocean. *Afr. J. Mar. Sci.*, 28(1): 33-40.
- 佐々木 喬. 1985. 海山における日本のトロール漁業の経過と現状. 水産海洋研究会報, 47-48: 161-166.
- Sasaki, T. 1986. Development and present status of Japanese trawl fisheries in the vicinity of seamounts. NOAA Technical Report NMFS, 43: 21-30.
- 澤田紘太. 2019. 多魚種漁業の資源評価と管理：天皇海山底魚漁業における“directed CPUE”解析からわかること. ななつの海から, 16: 9-18.
- 澤田紘太. 2020. 多様な生活史と「順応的管理」：天皇海山における底魚資源管理の現状と課題. 水産海洋研究, 81: 38-39.
- Sawada, K. 2024. Small Working Group on NPA and SA - Summary for 2024. NPFC-2024-SSC BFME05-WP17. 4 pp.
- Sawada, K., and Ichii, T. 2020a. Catch size composition of splendid alfonsino in the Emperor Seamounts area before and after the implementation of the mesh size regulation. NPFC-2020-SSC BFME01-WP05 (Rev.1). 3 pp.
- Sawada, K., and Ichii, T. 2020b. Blast from the past: a brief summary on the past studies for bottom fish stocks in the Emperor Seamounts area. NPFC-2020-SSC BFME01-WP04. 9 pp.
- 澤田紘太・西田一也・米崎史郎・清田雅史. 2017. 激しく変動する資源とその代替資源：天皇海山の多魚種底魚漁業における狙い操業を考慮した CPUE の計算. 東北底魚研究, 37:

- 95-104.
- Sawada, K., Nishida, K., Yonezaki, S., and Kiyota, M. 2018. Review of biology and fisheries of splendid alfonsino *Beryx splendens*, especially in the Emperor seamounts area. NPFC-2018-SSC- BF01-WP03. 26 pp.
- Sawada, K., and Yonezaki, S. 2019. Yield-per-recruit analysis of splendid alfonsino in the Emperor Seamounts. NPFC-2019-SSC BF02-WP01. 9 pp.
- 芝田健二. 1985. 房総海域におけるキンメダイについて—I 成熟と性比. 千葉県水産試験場研究報告, 43: 3-9.
- Shotton, R. 2014. Yield per Recruit analysis of Alfonsino and implications for their management in the Southern Indian Ocean. SIODFA Technical Paper 14/01. 17 pp.
- Shotton, R. 2016. Global review of Alfonsino (*Beryx* spp.), their fisheries, biology and management. FAO Fisheries and Aquaculture Circular. 153 pp.
- Small Scientific Committee on Bottom Fish and Marine Ecosystems. 2021. 2nd Meeting Report. NPFC-2021-SSC BFME02-Final Report. 131 pp.
- Small Scientific Committee on Bottom Fish and Marine Ecosystems. 2024. 5th Meeting Report. NPFC-2024-SSC BFME05-Final Report. 149 pp.
- 水産庁. 2008a. 北太平洋の天皇海山及び北ハワイ海嶺水域における脆弱生態系の特定. 底魚漁業操業が当該脆弱生態系及び海洋生物種に与える影響評価及び深刻な悪影響が存在する場合の保存管理措置に関する報告書 (底びき網漁業の場合). 15 pp.
http://www.jfa.maff.go.jp/j/study/pdf/t_j.pdf (2024 年 11 月 28 日)
- 水産庁. 2008b. 北太平洋の天皇海山及び北ハワイ海嶺水域における脆弱生態系の特定. 底魚漁業操業が当該脆弱生態系及び海洋生物種に与える影響評価及び深刻な悪影響が存在する場合の保存管理措置に関する報告書 (底刺し網漁業の場合). 15 pp.
http://www.jfa.maff.go.jp/j/study/pdf/s_j.pdf (2024 年 11 月 28 日)
- 水産庁. 2008c. Appendix D: キンメダイの資源評価. Information describing splendid alfonsin (*Beryx splendens*) fisheries relating to the North Western Pacific Regional Fishery Management Organisation. 22 pp.
http://www.jfa.maff.go.jp/j/study/pdf/appendix_d.pdf (2024 年 11 月 28 日)
- 高木康次. 2020. 伊豆半島東岸沖海域におけるキンメダイ漁業の食害被害について. 伊豆分場だより, 362: 5-9.
- 高橋侑大. 2018. 天皇海山海域におけるキンメダイの年齢、成長及び漁獲方策に関する研究. 平成 29 年度東京海洋大学修士論文. 78 pp.
- 高橋善弥・佐々木 喬. 1977. 北太平洋中部海山におけるトロール漁業. 北洋底魚漁業—資料 (3). 45 pp.
- 武内啓明. 2014. キンメダイの生物学的特性ならびに神奈川県における漁業および資源管理. 神奈川県水産技術センター研究報告, 7: 17-35.
- Taniuchi, T. 1988. Aspects of reproduction and food habits of the Japanese swellshark *Cephaloscyllium umbratile* from Choshi, Japan. Nippon Suisan Gakkaishi, 54: 627-633.
- Taniuchi, T., Kanaya, T., Uwabe, S., Kojima, T., Akimoto, S., and Mitani, I. 2004. Age and growth of alfonsino *Beryx splendens* from the Kanto District, central Japan, based on growth increments on otoliths. Fish. Sci., 70: 845-851.
- Varghese, S.P., Somvanshi, V.S., John, M.E., and Dalvi, R.S. 2013. Diet and consumption rates of common dolphinfish, *Coryphaena hippurus*, in the eastern Arabian Sea. J. Appl. Ichthyol., 29: 1022-1029.
- Vinnichenko, V.I. 1997. Vertical daily migrations of the slender alfonsino *Beryx splendens* (Berycidae) at the underwater rises of the open North Atlantic. J. Ichthyol., 37: 438-444.
- 亘 真吾. 2017. キンメダイの資源状況と資源管理. 月刊海洋, 49: 493-496.
- 亘 真吾・米沢純爾・武内啓明・加藤正人・山川正巳・萩原快次・越智洋介・米崎史郎・藤田 薫・酒井 猛・猪原 亮・穴道弘敏・田中栄次. 2017. キンメダイの資源生態と資源管理. 水産研究・教育機構研究報告, 44: 1-46.
- Wiff, R., Quiroz, J.C., Flores, A., and Gálvez, P. 2012. An overview of the alfonsino (*Beryx splendens*) fishery in Chile. Workshop on Management of Alfonsino Fisheries: Rome, 10-12 January 2012. FAO Technical Papers. 25 pp.
- 山田梅芳・時村宗春・堀川博史・中坊徹次. 2007. キンメダイ. In 東シナ海・黄海の魚類誌. 東海大学出版会, 神奈川. 359-365 pp.
- 柳本 卓. 2004. 天皇海山における底魚漁業とキンメダイ *Beryx splendens* の生物学的特性. 黒潮の資源海洋研究, 5: 99-109.
- 柳本 卓・酒井 猛・越智洋介・蛭名儀富・藤野忠敬. 2015. mtDNA 調節領域の塩基配列により推定されたキンメダイの集団構造. 日本水産学会誌, 81: 958-963.
- 米沢純爾. 2011. 漁獲量、CPUE、尾叉長組成からみた日本近海におけるキンメダイの資源動向. 黒潮の資源海洋研究, 12: 91-97.
- Yoshino, T., Kon, T., and Miura, A. 1999. Morphological differences between *Beryx splendens* Lowe and *B. mollis* Abe (Teleostei: Beryciformes: Berycidae). Bull. Fac. Sci., Univ. Ryukyus, 67: 77-86.
- Yoshino, T., and Kotlyar, A.N. 2001. World distribution of the baloon alfonsin, *Beryx mollis* (Pisces: Beryciformes: Berycidae). Bull. Fac. Sci., Univ. Ryukyus, 72: 119-123.

キンメダイ（天皇海山海域）の資源の現況（要約表）

世界の漁獲量 (最近 5 年間)	713～1,701 トン 最近 (2023) 年：1,701 トン 平均：1,255 トン (2019～2023 年)
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	713～1,701 トン 最近 (2023) 年：1,701 トン 平均：1,252 トン (2019～2023 年)
資源評価の方法	加入量あたり漁獲量 加入量あたり産卵資源量
資源の状態 (資源評価結果)	トロール漁業については成長乱獲が強く示唆。小型魚の漁獲により産卵ポテンシャルが損なわれている可能性がある。ただし計算の仮定に由来する悲観的な方向へのバイアスがあり得る。
管理目標	検討中
管理措置	○NPFC 保存管理措置： ・操業許可漁船数の増加禁止（我が国＝底びき網：7 隻以内、底刺網：1 隻以内） ・北緯 45 度以北における操業禁止 ・水深 1,500 m 以深での操業禁止 ・C-H 海山及び光孝海山南東部の閉鎖 ・底刺網を海底から 70 cm 以上離して敷設する ・底びき網のコッドエンド目合い 13 cm 以上（5 kg の張力をかけて計測） ・11～1 月（クサカリツボダイ産卵期）の禁漁 ・漁業者から独立した科学オブザーバーの 100%乗船 ○我が国自主措置： ・刺網の網目の結節から結節までの長さ 12 cm 以上（許可の条件） ・漁獲努力量上限の設定（底びき網年間総曳網時間 5,600 時間以内）
管理機関・関係機関	NPFC
最近の資源評価年	2024 年
次回の資源評価年	未定